

平成21年5月25日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2005～2008

課題番号：17520051

研究課題名(和文) ジネーンドラブッディ『集量論複注』の批判的校訂

研究課題名(英文) Towards the Critical Edition of Jinendrabuddhi's Pramāṇasamuccaya-tīkā

研究代表者

桂 紹隆 (KATSURA SHORYU)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：50097903

研究成果の概要：インド論理学に画期的な変化をもたらしたディグナーガの著『集量論』に対するジネーンドラブッディの『複注』第3章の梵語写本を解読し、批判的校訂を作成することにより、未だ梵語写本が発見されていない『集量論』第3章の梵語原典を再構成した。その結果、従来チベット語訳でしか知ることができなかったディグナーガ論理学の全貌をより正確に把握し、提示することができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	900,000	0	900,000
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,600,000	540,000	4,140,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：仏教論理学、ディグナーガ、集量論、ジネーンドラブッディ、梵語仏典写本

## 1. 研究開始当初の背景

ディグナーガ(陳那、480～530)はインド論理学に画期的な変革をもたらした仏教論理学者であるが、その著『集量論』は梵語原典が現存せず、2種の不満足なチベット語訳で研究されてきた。

同書の正確な理解のためにはジネーンドラブッディ(8世紀)の『複注』を利用しなければならないが、オーストリア学士院シュタインケルナー教授の長年の努力の結果、チベットの僧院で秘蔵されていた梵語写本が仏教論理学研究者に利用可能となった。

同教授は2005年に『複注』第1章の批判的校訂を北京の蔵学研究中心から出版し、第

2章の校訂を終えつつある。当該研究代表者桂は、同教授から同書の第3章、第4章、第6章の批判的校訂を作成することを依頼された。

## 2. 研究の目的

(1) ディグナーガの著『集量論・自注』に対するジネーンドラブッディの『複注』第3章の、写本に忠実な翻字(トランスクリプション)と批判的校訂(クリティカル・エディション)を完成すること。

(2) それにもとづいてディグナーガの失われた梵語原典を再構成し、インド論理学に決

定的な影響を与えた彼の論理学の全貌を明らかにすること。

### 3. 研究の方法

(1) 写本の写真は、中国蔵学研究中心から、オーストリア学士院を介して提供され、その試みの翻字はシュタインケルナー教授のウィーン・グループから提供された。

(2) 上記の資料と同書のきわめて優れたチベット語訳にもとづき、研究代表者が批判的校訂と『集量論』梵語原典の再構成を試み、日本の研究グループに配布した。

(3) それを研究分担者小野と研究協力者渡辺は筑波大学で検討し、批判的校訂とディグナーガの再構成を修正し、両者の和訳を準備した。一方、研究協力者志賀は、独自に両者の英訳を準備した。

(4) 月2回、龍谷大学文学部に約15名の研究者が集まり、『集量論』の再構成、『復注』の批判的校訂、両者の和訳・英訳を検討し、最終的な『復注』の校訂を作成した。

(5) この研究会には、龍谷大学神子上恵生名誉教授、京都大学赤松明彦教授、同ディワール・アーチャーリヤ教授、神戸女子大学狩野恭教授などに加えて、オーストリア学士院シュタインケルナー教授、クラッサー博士、ラシック博士、マギル大学のギロン教授など海外からの研究者が多数、随時参加した。

### 4. 研究成果

(1) 当初の目的であった『集量論復注』第3章全体の批判的校訂を完了することはできなかったが、全70フォリオ中50フォリオの校訂作業を終え、和訳・英訳を完了した。さらに、該当部分の『集量論』及び『自注』の梵語原典の再構成を完了した。

(2) 『集量論』は全6章からなる。ディグナーガは2種の認識手段(プラマーナ)を認めるが、第1章はそのうち「直接知覚」(現量)を扱い、第2章は「推理」(比量)を扱う。論争相手を説得するために彼が用いる論証式は三つの命題からなるが、第3章はそのうち「主張」(宗)と「理由」(因)を扱い、第4章は「喩例」(喩)を扱う。第5章はディグナーガが独自に開発した言語哲学「アポーハ論」を扱い、第6章はインド論理学の揺籃期からある「誤った論難」(過類)を彼独自の論理学の視点から再検討している。

(3) 第3章では、まず「自己のための推理」(為自比量)と呼ばれる「推理」に対して、「他者のための推理」(為他比量)と呼ばれ

る「論証」(能立)の一般的な定義が「自己の経験内容を明らかにすること」という形で与えられる。(PS 3.1ab)

次に、ディグナーガ自身の「主張」の定義が与えられ、それに違反する4種(+5種)の「疑似主張」(似宗)が例示される。(PS 3.1cd-2)

さらに、インド六派哲学の一派であるニヤヤ派と、ディグナーガの先輩であるヴァスバンドゥ(世親、400-480)に帰せられる『論規』の「主張」の定義と彼らの「疑似主張」の例が否定される。(PS 3.3-7ab)

以上で主張命題の吟味が終わり、次に理由命題が取り上げられ、まずディグナーガの自説が展開される。

彼自身の「理由」の定義が「論証されるべきものの属性」という一般的な形で与えられる。(PS 3.8)さらに、「論証されるべきもの」(所立)の同類(同品)と異類(異品)への配分(ディストリビューション)という視点から分類すると、9種の「理由」が想定される。ディグナーガの創案と見なされる「九句因説」である。(PS 3.9)

「論証されるべきもの」という術語が「主張命題」とその構成要素である「主張命題の主題」(有法)と「属性」(法)の三者のいずれかを指示しうることで指摘される。(PS 3.10)

「理由」は論争に関与する双方に認められるものでなければならないが、それに違反する5種の「疑似理由」(似因)が列挙される。(PS 3.11)

「論証されるべきものの属性」ではないと確立されるものは「欠陥のある理由」(ドゥーシャナ)である。(PS 3.12)

「論証されるべきもの」すなわち、「主張命題の主題」の既知の「属性」が未知の「属性」を論証するのである。(PS 3.13)

帰謬論証(プラサンガ)による「論駁」(パリハーラ)の解説が与えられる。(PS 3.14)

理由命題の正しい定式(方便、フォーミュレーション)が教えられる。(PS 3.15)

サーンキヤ派の2種の論証形式(ヴィータとアーヴィータ)が、その具体例を挙げて批判される。(PS 3.16-17)

「同類」と「異類」の定義が与えられる。(PS 3.18-20)

「九句因」の具体例が与えられる。(PS 3.21)  
九句因のうち、「同類」の一部または全体に存在し、「異類」にはまったく存在しないものが、2種の正しい「理由」である。その逆は「相容れない」(相違)と呼ばれる2種

の「疑似理由」であり、それ以外の五つは「不確定」（不定）と呼ばれる「疑似理由」である。(PS 3.22)

「理由」は同一論証式において一つしか認められない。(PS 3.23-24)

「疑似理由」に関するまとめの詩頌ふたつ(PS 3.25-26)

「相容れない理由」が吟味される。(PS 3.27)

再度、別の視点から「九句因」が吟味される。ここでディグナーガが 2 種の否定に言及することはきわめて興味深い。(PS 3.28-31)

以上で、「理由」と「疑似理由」に関するディグナーガの自説が紹介されたことになる。

以下、ヴァスバンドゥの『論規』に見られる「そのようなものと不可離の関係にある属性を提示するのが<理由>である」という定義が取り上げられ、批判される。(PS 3.32-36)

さらに、ニヤーヤ派の「実例との共通性にもとづいて<論証されるべきもの>を論証するのが<理由>である」という定義が批判される。(PS 3.37-41)

(4) 平成 21 年 3 月末の段階で、PS 3.39a までの『集量論復注』の批判的校訂、『集量論・自注』の梵語原典の再構成を終え、両者の和訳と英訳を完成している。

幸いにして、平成 21 年度から 3 カ年、同じ研究目的を継続して遂行するために、科学研究費が給付されることになったので、第 3 章の残余（約 20 フォリオ）と第 4 章（約 20 フォリオ）、具体的にはディグナーガによるニヤーヤ派の「理由」説批判の後半部分、ヴァイシェーシカ派の「理由」説批判、サーンキヤ派の「理由」説批判、さらにヴァスバンドゥ、ニヤーヤ派、ヴァイシェーシカ派それぞれの「疑似理由」説批判の部分の批判的校訂と第 4 章全体の批判的校訂を完了する。

完成した『集量論復注』の正確な翻字と批判的校訂は中国蔵学研究中心とオーストラリア学士院の共同出版という形で公刊される予定である。

(5) 一方、『復注』の提供する『集量論・自注』の断片などを利用して後者の還元梵文テキストを作成し、それにもとづいてディグナーガ論理学を正確に再構築することが本研究の目的であるが、その経過報告とも言うべきものを平成 20 年 10 月に北京の中国蔵学中心で開催された「北京蔵学討論会会議 2008」に招待され、発表した。完成原稿は、同学会のプロシーディングスに Rediscovering Dignāga through Jinendrabuddhi というタイトルで公刊される。

同学会においては、『集量論復注』の校訂作業を行ってきたシュタインケルナー教授、クラッサー博士などウィーン・グループと、さらにミュンヘン大学のハルトマン教授、北京大学の段晴教授ら梵語仏典の写本研究に携わっている第一線の研究者たちとお会いできたことはきわめて有益であった。

同発表で明らかにしたのは、以下の点である。『集量論』第 3 章冒頭の 29 詩頌に関する限り、その梵語原典を『復注』から約 55 パーセント回収することができ、その他のテキストで同定される他の梵語断片を考慮に入れると、約 73 パーセントが回収される。

残存する 2 種のチベット語訳のうち、通常カナカヴァルマンの手になるものがヴァスドララクシタのものより正確であり、ジネードラブディの『復注』にも支持されることが知られているが、時にはヴァスドララクシタの方が『復注』の支持を得ている場合があることを指摘した。このことは、少なくとも三つの異なる写本の伝承が存在したことを示唆している。

『集量論』第 3 章の自説部分の最後の 2 詩頌(3.30-31)は、2 種のチベット語訳の違いが大きくどれがディグナーガの原典であったのか決めがたいが、『復注』も考慮すると詩頌の変遷過程を想定することができる。

最後に、『集量論』第 3 章冒頭 29 詩頌の梵文還元テキストを以下に挙げる。太字は『復注』から回収される語、斜体字はチベット語訳からの還元梵語、その他は他の梵語テキストに発見されるディグナーガの断片から回収される語を表している。

### Pramāṇasamuccaya Chapter 3.1-29

parārtham anumāṇam tu svadr̥ṣṭārthaprakāśanam /  
tatrānumeyanirdeśo hetvarthaviśayo mataḥ //1//  
svarūpeṇaiva nirdeśyaḥ svayam iṣṭo 'nirākṛtaḥ /  
pratyakṣārthānumāṇāptaprasiddhena svadharmiṇi //2//

sādhyanirdeśa ity atra siddhābhāve kṛtārthatā /  
tathā cāsiddhadṛṣṭāntahetuvādaḥ prasajyate //3//  
dharma sādhye na sādharmaṇam hetur dharmiṇy  
anarthakaḥ /

pūrvāvadhāraṇam vyartham anīṣṭam itaratra tu //4//  
tathā sādhyābhidhāne 'pi pakṣādhiḥyād  
asambhavaḥ / vicāraṇāyām iṣṭo 'yam  
anīṣṭavinivṛttaye //5//

hetupratijñāvyāghāte pratijñādoṣa ity asat /  
sa hi dr̥ṣṭānta evokto vaidharmyenāsuśikṣitaiḥ //6//

hetus tūpanayenātra sādhyāḥ tan na virodhavat //7ab//  
sādhyadharmo yato hetus tadābhāsa ca bhūyasa /  
tasmāt tadvistarāḥ pūrvam hetvādyarthāt pradarśyate //8//

sapakṣe sann asan dvedhā pakṣadharmāḥ punas  
tridhā /

pratyekam asapakṣe 'pi sadasaddvidhatvataḥ //9//

samudāyārthasādhyatvād dharmamātre 'tha dharmiṇi /  
 amukhye 'py ekadeśatvāt sādhyatvam upacaryate //10//  
 dvayoḥ siddhena dharmeṇa vyavahārād viparyaye /  
 dvayor ekasya sandehe dharmyasiddhau ca neṣyate //11//  
 nāniṣṭher dūṣaṇaṃ sarvaṃ prasiddhas tu dvayor api  
 / sādhanam dūṣaṇam vāsti sādhanāpekṣaṇāt punaḥ //12//  
 na dharmī dharmiṇā sādhyo na dharmas tena  
 dharmy api / dharmeṇa dharmāḥ sādhyas tu  
 sādhyatvād dharmiṇas tathā // 13 //  
 hetupratijñādvāreṇa yatrāniṣṭiḥ prasajyate /  
 taddvāreṇa prayogāt sa parihāra itīṣyate //14//  
 hetoḥ sādhyānvayo yatrābhāve 'bhāvaś ca kathyate /  
 pañcamyā tatra drṣṭānto hetus tūpanayān mataḥ //15//  
 hetvabhāvaprasaṅgas tu yatrāvītena kathyate /  
 sa drṣṭāntadvayāt siddhes tasmād vītān na bhidyate //16//  
 prasaṅgo 'pakṣadharmatvāt pūrvatropagame sati /  
 hetupratijñāyos teṣāṃ doṣoktyā dūṣaṇam gataḥ //17//  
 viśeṣo na sa eveti kṛtvānyatropadariṣyate /  
 sapakṣa iti pakṣaḥ syād bhedo 'py atreti neṣyate //18//  
 tato 'nyas tadviruddho vā nāsapakṣo dvidhāpi hi /  
 hetvabhāvo viruddhāc ca vyavacchedaḥ prasajyate //19//  
 sapakṣābhāva evātas tathā hy eko 'pi lakṣaṇāt /  
 anekārthagatir yuktaḥ na sāmānyāj jaḍo 'nvayaḥ //20//  
 prameyakṛtakānityakṛtaśrāvaṇayatnājāḥ /  
 anityayatnajāsparśā nityatvādiṣu te nava //21//  
 tatra yaḥ san saṅgītye dvedhā cāsaṃs tadatyaye /  
 sa hetur viparīto 'smād viruddho 'nyas tv anīcītaḥ //22//  
 vivakṣitaikasāṅkhyatvaṃ viruddhābhyāṃ hi  
 saṃśayaḥ / tathā saṃśayahetubhyāṃ drṣṭa ekatra  
 niścayaḥ //23//  
 lakṣaṇena dvayor yogo naikasyeṣṭo dvayor dvayoḥ /  
 aviruddhas tv anekatve 'py ekatvaṃ na vyatikramet //24//  
 asādhāraṇasāmānyaviruddhāvyabhicāriṇaḥ / dharmāḥ  
 sarvatra yeṣāṃ ca tatra saṃśayahetavaḥ //25//  
 pakṣadharmekṣaṇāj jñāpsor iṣṭe yasmāc ca bādHITE /  
 viparyāsavimarśāptir hetvābho na tato 'paraḥ //26//  
 dharmadharmisvarūpasya tadviśeṣasya caiva saḥ /  
 viparītopakāritvād viruddho 'sati bādHane //27//  
 sādHāraṇo viśeṣaś ca dharmāḥ sādhye dvidhāpi hi /  
 tatrādyau saṃśayaīva tridhā śeṣas tv apekṣayaḥ //28//  
 anuvṛtter avṛtteś ca vyatirekānvayākṣamau /  
 sambhavo na ca sarvatra yan nāsarvatra sambhavaḥ //29//

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

① 渡辺俊和、ディグナーガとサーンキヤ学派との論争 — プラダーナの存在論証を巡つ

て — 印度学仏教学研究、第57巻1号 (2008) pp.291-295. (査読有)

② 渡辺俊和、プルシャの存在論証を巡る論争、比較論理学研究、第5号 (2008) pp.63-77. (査読無)

③ 桂紹隆、Dharmakīrti's Proof of the Existence of Other Minds, *Pramānakīrti Festschrift for Prof. Ernst Steinkellner*, Vienna, pp. 407-421, Oct. 2007. (査読無)

[学会発表] (計8件)

① 桂紹隆、Rediscovering Dignāga through Jinendrabuddhi、北京蔵学討論会 2008、2008.10.15、中国蔵学研究中心

② 渡辺俊和、ディグナーガとサーンキヤ学派との論争 — プラダーナの存在論証を巡って — 一、日本印度学仏教学会、2008.9.4、愛知学院大学

③ 渡辺俊和、Dignāga's View on the Liar Paradox、International Conference on Logic, Navya-Nyāya & Applications; A Homage to Bimal Krishna Matilal、2007.1. 7、Jadavpur University, Kolkata.

[図書] (計1件)

① 小野基、*Keyword In Context Index to Jinendrabuddhi's Viśālāmalavati, Pramāṇasamuccayaṭīkā Chapter I*. Edited by Motoi ONO and Jun Takashima. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies, 2006, ps. 542+i.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

桂紹隆(KATSURA SHORYU)  
 龍谷大学・文学部・教授  
 研究者番号：50097903

### (2) 研究分担者

小野基(ONO MOTOI)  
 筑波大学・人文社会学研究科・准教授  
 研究者番号：00272120

### (3) 連携研究者

### (4) 研究協力者

渡辺俊和(WATANABE TOSHIKAZU)  
 オーストリア学士院特別研究員

志賀浄邦(SHIGA KIYOKUNI)  
京都産業大学・文化学部・講師  
研究者番号：60440872